120.8
Iw2
11

ゴータマ・ブッダ I

原始仏教 I

横浜市立大学図書館
92W 22501
受入

中村元選集［決定版］第11巻

春秋社

はしがき

この書は、伝説的空想的要素の多いもろもろの〈仏伝〉の類いを意識的に遠ざけて、古い聖典のなかから断片的な記述を集録して、この偉大な歴史的人物像を、できるだけ現実の歴史性に即して構成し表現しようとしたものである。

この書の初版が昭和四十四年に刊行されてから、ほぼ二〇年を経過した。そのあいだに、学界にもいろいろ進歩が見られるし、わたくし自身の研究も歩みをひろげた。「ゴータマ・ブッダの生涯」に関しては、旧版の所論で大過ないと思うが、今回の新版では次の点で増補を加えた。

（1）後代の資料のうちにも、非常に古くからの伝承を内含している場合があると考えられるから、それを取りださねばならない。このためには複雑な手つづきを必要とする。こういう検討をある程度試みて、その成果を挿入し、加えることにした。

（2）考古学的な発掘も次第に進展しつつある。それは適当に考慮さるべきであろう。

（3）とくに、仏伝に関する仏教美術の遺品は、多くは伝説・空想にもとづくものであるが、歴史性をどれだけ看取し得るか、それを検討してみた。

（4）わたくしは、とくにこの二〇年間に、きわめて古いと思われるパーリ語またはサンスクリット

語の原典を邦訳してみたが、その成果を適宜組み入れることにした。ジャータカ序論（Nidānakatha）などの訳もかなり考慮して取り入れたが、その叙述のうち歴史性と神話的空想を判然と区別することの困難な場合もあるので、その場合にはわたくしがそこで加えた寸言をもとに、読者のほうで適宜判断していただきたい。

この新版でもゴータマ・ブッダの歴史性あるいはかれに関する歴史的事実を明らかにしたとはいえないが、いくらかでも真相に近づくことはできたかと思う。まだまだ不充分であるが、わたくしとしては、まずなし得るぎりぎりのところであった。

以上によって、歴史的人物としてのゴータマ・ブッダのすがたが少しでも明らかにされることができたならば、と願っている。

なお歴史的人物としてのゴータマの伝記を考察するためには、当然その時代の政治的社会的背景を考慮しなければならない。ただそのことはのちにこの選集のうちの「インド史I」（第5巻）でやや詳しく論じるので、ここでは省略することにした。

さて、本書をはじめとして原始仏教に関する八冊の書を刊行する。分量だけについていうならば、詳しきにすぎるといわれるかもしれないが、しかしそれでも原始仏教に関する全面的・網羅的な研究ではない。原始仏教聖典を翻訳した『南伝大蔵経』だけでも邦文で七〇巻以上あるのであるから、それらを精密に研究したならば何百巻あっても足りないであろう。以下の一連の八巻においては、比較的古いと思われる資料を中心として、やや遅れて成立した資料を適宜補って、組み合わせて述べることにした。いわば成立史的視点から書かれた概説試論にすぎない。ただ原典を自分で納得のいくように理解につとめた記録とでもいうべきであろう。

本書の校正その他については、東方研究会の羽矢辰夫君、東京大学大学院の佐藤裕之君のご尽力にあずかった。また明治大学講師の阿部慈園氏のご尽力をちょうだいした。最後に、春秋社社長、神田明氏、同編集部の佐藤清靖氏にもお世話になった。記して感謝の意を表する。

一九九一年十一月二十二日

著　者

旧版 はしがき

過去二千数百年にわたってひろく人類の師として人々を導き、仏教の開祖として仰がれるゴータマ・ブッダ（釈尊）が実際にどのような生涯を送ったか、そのあとを能うかぎり明らかにしようとするのが、この書の目的である。

だからこの書は仏伝でもなければ、仏伝の研究でもない。いわゆる仏伝のうちには神話的な要素が多いし、また釈尊が説いたとされている教えのうちにも、後世の付加仮託になるものが非常に多い。こういう後代の要素を能うかぎり排除して、歴史的人物としての釈尊の生涯を可能な範囲において事実に近いすがたで示そうとつとめた。

そのため筆者は諸種の仏伝を必要に応じていちおう参考にしたけれども、それにもっぱら準拠しないで、むしろ原始経典自体のうちに出てくる事件の継起の記述を手がかりとして、経典自体の文句（つまり仏伝よりも古い資料）について、それに原典批判的検討を加えて、ゴータマ・ブッダの生涯の事実に肉迫しようとした。従来、原始仏教聖典といえばパーリ語のものと漢訳とのみに限られていたようであるが、最近は中央アジアから発見されたサンスクリット語の聖典やチベット蔵経のうちの対応部分も逐次刊行されているので、学問的検討にはいっそう好都合になってきた。

しかし諸種の異なったテクストの比較研究だけでは学問的に不充分である。筆者は必要に応じて乏しい知識をたよりに釈尊の生涯の個々の事件にインド学的な照明の光をあてて、インド思想史における意義を解明したいと願った。さらに考古学的資料や実地踏査にもとづく風土的考察検討も同様に重要である。これらにもとづいて、なんとかして事実に近いゴータマ・ブッダ伝を構成しようとめざした。ただ筆者の浅学と非力のため十全をつくし得なかったことを残念に思う。

こういう試みは、後世の仏教徒が心にえがいていた釈尊のすがたをこわすことになるかもしれないし、また読者の希望と正反対のすがたが出てくるかもしれないので、それは残念であるが、しかしいたしかたない。歴史的研究は小説ではない。われわれは歴史的真実をめざすのである。そうして充分な批判検討をへて現わし出されたゴータマ・ブッダのすがたは、われわれに向かって直接に、かならずやなにか意義の深いことを教えてくれるであろう。

歴史的人物としてのゴータマ・ブッダの生涯を明らかにするためには、なお検討すべきことが多い。ただいまここでは、いちおうかれの生涯と関係ある古い資料をかれの生涯にしたがって整理紹介し、いささか検討を加えたまでである。著者はなにも後代の仏伝に出ていることが、すべて虚構であるというのではない。ただ聖典に出てくる資料を主にして、釈尊の伝記を構成してみたというのである。思想的な問題は論じ残してあるが、これは別の巻にゆずりたい。

また歴史的研究としても、筆者のこの仕事だけではまだ充分ではなくて、なお残された課題がある。それは後代に成立した諸種の仏伝のなかから古い要素、あるいは事実として信頼し得る記述をとり出

すことである。しかしそれは非常に複雑な手つづきを必要とし、短時日のうちにはなしとげがたいので、これは後日にゆずり、いまここでは古い資料の紹介検討だけでやめておくことにした。諸種の仏伝のうちの有名な伝説でも、この書のなかで論じられていないものがあるが、それは古い資料に出ていないためであり、それについては将来詳細な検討を加えたい。

一九六八年七月二十二日

著者

目次

はしがき

旧版 はしがき

序 …… 三

一 考究の方法 …… 三

㈠ 仏伝に対する批判的検討 …… 三

㈡ 美術作品に見るゴークマ・ブッダの生涯 …… 一四

〔付〕ゴークマ・ブッダの生涯に関する従来の研究書 …… 二三

二 仏教興起の時代――概観 …… 二六

第一編 誕生・さとり・説法 …… 二九

第一章 誕生 …… 三一

一 歴史的背景 …… 三一

(一) シャカ族……三
(二) 家系……五
(三) カピラ城……六
二 誕生……五
(一) 受胎と盛夢に関する伝説……五
(二) 誕生の事実と伝説……八
(三) 生存年代……一〇
四 嬰児のすがた……一二
(五) 後代の仏誕伝説……一六
(1) ジャータカ註における叙述……一六
(2) 仏誕をたたえたマハーヴァストゥのことば……一
(3) マハーヴァストゥの伝える誕生伝説……一六
(六) 命名式……一四
第二章 若き日……一五
一 宮廷における生活……一五
(一) 幼かりし日……一五
(二) 若き日の悩み……一五

二 結婚……一九
三 ラーフラの誕生……一六
四 武術の習得……一八
五 歓楽に飽きる……一八
六 家を去る……一八
(一) 決意……一八
(二) 〈善を求めた〉ことの意義……一九
(三) 家を去ってからの道行き……一九
四 剃髪……二〇
第三章 求道の道行き……二九
一 バールガヴァ仙人のもとで……二九
二 ラージャガハへ行く……二〇
(一) ラージャガハ……二〇
(二) ビンビサーラ王との出会い……二七
(三) 世俗の王位を捨てて……二八
(四) アーラーラ仙人を訪ねる……二〇
(五) ウッダカ仙人を訪ねる……二六

(六) 無所有の境地……二四〇
(七) 非想非非想の境地(および四無色定)……二四五
三 苦行……二五八
(一) 苦行からさとりにいたるまでの一般的伝説……二五八
(1) 苦行に身をさいなむ……二五八
(2) 苦行を捨てる……二六五
(3) さとりの座につく……二八一
(二) 古い伝説にもとづく事実の解明……二九一
(1) 悪魔の誘惑についての古い記述……二九一
(2) さとりを開いたのちの悪魔の誘惑……三三五
(三) 苦行の実情……三三八
第四章 真理をさとる……三五九
一 さとりを開く……三五九
二 ブッダガヤー……三七〇
(一) 巡礼僧の伝えたブッダガヤー……三七〇
(二) ブッダガヤーの歴史……三七七
(三) 現在のブッダガヤー……三八五

三 なにをさとったか……三九二
(一) 十二因縁をさとったという伝承……三九二
(二) その他の伝承……四〇三
四 ゴータマ・ブッダのさとりの思想史的意義……四一七
第五章 真理を説く……四三三
一 ウルヴェーラーにて……四三八
(一) アジャパーラ榕樹のもとで……四三八
(二) ムチャリング樹のもとで……四四一
(三) ラージャーヤタナ樹のもとで——在俗信徒の帰依……四四四
(四) 説法の躊躇と梵天の勧め……四四五
二 伝道のための行動開始——ウパカ(アージーヴィカ教徒)との遭遇……四六五
三 ベナレスへ——ガンジス河を渡る……四七五
四 はじめての説法……四七八
(一) なにを説いたか……四七八
(二) 「転法輪経」……四八八
(三) 付加的教説……五〇八
(四) 悪魔の誘惑を斥ける……五一五

(四) 巡礼僧の伝えたサールナート……五三
(六) 現在のサールナート……五六
五　その後の教化活動……五三
六　ベナレスにて……五四
(一) ヤサの出家……五四
(二) ヤサの家での教化……五四
(三) ヤサの友人四人の出家……五五
(四) ヤサの友人五十人の出家……五八
(五) 伝道の勧めと悪魔の誘惑……五九
(六) 三帰依による受戒入団の由来……五五
(七) 悪魔の抵抗……五八
七　ウルヴェーラーへ……五八
(一) 「自己」を求める……五八
(二) ニグローダの帰服……五二
(三) ガヤーシーサ（象頭）山にて――燃える火の教え……六〇
第六章　有力信徒の帰依……六〇
一　ラージャガハにて……六〇
(一) ビンビサーラ王の帰依……六〇
(二) ラージャガハに住したことの意義……六三
(三) 懐疑論を超えて――サーリプッタとモッガラーナ……六五
二　故郷へ帰る……六四
(一) 古聖典のうちの記述……六四
(二) 「ジャータカ序」における記述……六五
三　コーサラ国にて……六一
(一) パセーナディ王……六一
(二) 商業資本家の帰依……六五
(三) サーヴァッティーにおける信徒たち……七〇
(四) 他の宗教との対決……七〇
(五) 女性による誘惑……七五
四　多彩な教化活動……七〇
五　南国のバラモン学徒たち……七四
六　教化の神話的伝承……七五
第七章　晩年の事件……七六
一　パセーナディ王との会見……七六

二　シャカ族の虐殺……　七三
〔付〕シャカ族の系譜一覧

凡例

一　引用符については、『　』は原文そのままの引用、あるいは直訳、あるいは書名、「　」は取意訳の場合、あるいは強調の場合に用いることにした。

二　難解な語に対しては、カッコ内に説明を加え、読み方の解りにくい語にはふりがなをつけた。

三　パーリ文、サンスクリット文を翻訳する場合に、呼びかけの繰り辺しを、ときには省略したことがある。インドの諸言語では、呼びかけが日本語の敬語法に相当すると思われるから、邦訳において敬語を用いるならば、呼びかけを全部訳す必要はない、と思われるからである。

四　インドの地名に関しては、中村元編集『図説仏教語大辞典』（東京書籍、昭和六三年二月）の凡例（一五―一七ページ）にあげた記載のとおりにした。

五　インドないし南アジアの名称のカナ表記に関しては、原発音に近くてしかも日本人が発音しやすい仕方によった。従来、日本のインド学者は、西洋人の記載を日本ふうに改めて記載しているが、西洋人の発音を守りつづけることにあまりにも固執している傾きがある。西洋人学者の発音が正しいという保証はどこにもない。たとえば、日本語の短音「ア」は、インド人の発音する長音 ā に近く、日本語の長音「アー」はむしろインド人の超長音(pluti, 三モーラの長さに延ばして発音すること）に近い。だからしょせん日本の字で厳密に表記することは不可能である。

　またṣ音とś音とは明らかに別の子音であるが、その両音を区別して日本のカナで、しかも原発音に忠実に表記することは困難である。ことにベン

序

一　考究の方法

(一)　仏伝に対する批判的検討

人類の師と仰がれる歴史的人格としてのゴータマ・ブッダは実際にはいかなる生涯を送り、どのようなことを説いたのであろうか。

ゴータマ・ブッダすなわち釈尊を人類の師と呼ぶことに異議を挿まれるかもしれない。かれは仏教徒にとってこそ師であるが、他の人々にとってはそうではない、と。しかし今日では世界全体を通じて自分の属する宗教と自分の信念ないし人生観とのあいだに大きな食いちがいがおこっている。日本